

date : 年 月 日

古典

学習内容 :

おくのほそ道 (平泉)

学籍番号

氏名

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ、高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠もり、功名一時の草むらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

(平泉)

大門 —— 平泉館の南大門

義臣 —— 忠義の臣 || 忠誠を誓う家臣 (家来)

国破れて山河あり、城春にして草青みたり

—— 杜甫の「春望」の一節 (国破山河在 城春草木深)

兼房 —— 義経の家臣 (老齢である)

▽ 三代の栄耀 とあるが、「三代」とは

藤原清衡 基衡 秀衡

◇ その栄耀の痕跡 (名残り) 二点

- ・ 大門の跡が一里ほど手前にある。敷地の広さ。
- ・ 金鶏山のみ形を残す。人工山が残っている。

▽ 高館 とは、

源義経の居館 義経堂 判官館 衣川館 ともいう。
義経最期の地

▽ 時のうつるまで涙を落としはべりぬ とは、どれくらいの間なのだろう。また、誰を意識しているだろうか。

ある程度長い時間 西行

▽ 夏草や兵どもが夢の跡 の句 季語 夏草 季節 夏

義経主従が切り結び奮戦する様子と
現在の雑草が生い茂る様子が二重写しになる

▽ 既に頽廃空虚の草むらとなるべきを とは何をひき合いにして述べたものか。 高館

▽ 五月雨の降り残してや光堂 の句 季語 五月雨 季節 夏

◎ この句に込めた感動とは
大門の跡や金鶏山のように「あるにはあるが」のものでなく、当時を偲ぶことのできる実景として残っていたところ。

date : 年 月 日

古典

学習内容：推察する

おくのほそ道 (松島)

学籍番号

氏名

松島

日既に午にちかし。船をかりて松島にわたる。其の間二里余り、雄島の磯につく。

そもそもことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたふ。島々の数を尽して、そばだつものは天を指さし、ふすものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重に畳みて、左にわかれ右につらなる。負へるあり抱けるあり、児孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉夕風に吹きたはめて、屈曲をのづからためたるがごとし。その気色、よう然として美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽さむ。

雄島の磯は地つづきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禅石などあり。

はた、松の木陰に世をいとふ人も稀々見えはべりて、落穂・松笠など打けふりたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とはしられずながら、まずなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて、昼のながめまたあらたむ。

江上に帰って宿を求めれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで、妙なる心地はせらるれ。

松島や 鶴に身をかれ ほととぎす

曾良

よは口をとちて眠らんとしていねられず。旧庵をわかるる時、素堂松島の詩あり。原安適松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて、こよひの友とす。かつ、杉風・濁子が発句あり。

午一方位でいうと南、つまり時刻では昼の零時
扶桑一中国で日本を指した言葉

▽「雄島が磯」の場面で「草の庵 ますなつかしく 江上に帰り」とあるが何を意識してのものか？

深川の元芭蕉庵 (江上の破屋)

▽芭蕉は「松島」では句(発句)を残していない。

その理由として挙げられるのが、「あまりに美しかったため、筆舌に尽くし難かったため」という見方である。そこで別の

松島

日はすでに南中に近づいたので、船を借りて松島に渡る。二里ほど船が進み、雄島の磯についた。

まあ古くから言われていて今さら言うことでもないのだが、松島は日本一景色のよい所だ。中国で絶景として名高い洞庭・西湖と比べても見劣りがしないだろう。湾内に東南の方角から海が流れ込んでいて、その周囲は三里、中国の浙江を思わせる景色をつくり、潮が満ちている。湾内は沢山の島々があり、そそり立った島は天を指差すようで、臥すものは波にはらばふように見える。あるものは二重に重なり、またあるものは三重にたたみかき、左にわかれ右につらなる。

小島を背負っているように見える島もあり、前に抱いているようなものもあり、まるで親が子や孫を抱いて可愛がっているようにも見える。松の緑はびっしりと濃く、枝葉は夕風に吹きたはめられて、その屈曲は自然のものでありながら、人が見栄えいように意図的に曲げたように見える。

蘇東坡の詩の中で、西湖の景色を絶世の美人、西施が美しく化粧した様子に例えているが、この松島も深い憂いをたたえ、まさに美人が化粧したさまを思わせる。神代の昔、山の神「大山祇(おおやまずみ)」が作り出したものだろうか。自然の手による芸術品であるこの景色は、誰か筆をふるい言葉をつくしても、うまく語れるものではない。

雄島の磯は陸から地続きで、海に突き出している島である。瑞巖寺中興の祖、雲居禪師の別室の跡や、座禅石などがある。

また、世の喧騒をわずらわしく思い庵を建てて隠遁生活をしている人の姿も松の木陰に何人か見える。落穂や松笠を集めて炊いて食料にしているようなみずぼらしい草の庵の静かな暮らしぶりで、どういふ来歴の人かはわからないが、やはり心惹かれるものがあり立ち寄りなりなどしているうちに、月が海に映って、昼とはまたぜんぜん違う景色となった。

浜辺に帰って宿を借りる。窓を開くと二階作りになっていて、風と雲の中にじかに旅寝しているような、表現しがたいほど澄み切った気持ちにさせられた。

松島や鶴に身をかれほととぎす 曾良

(ここ松島ではほととぎすはそのままでの姿ではつりあわない。鶴の衣をまどって、優雅に見せてくれ)

(曾良は句を詠んだが)私は感激のあまり句が出てこない。眠ろうとしてもワクワクして寝られない。

深川の庵を出る時、素堂が松島の詩を、原安適が松が浦島を詠んだ和歌を饒別してくれた。それらを袋から取り出し、今夜一晩を楽しむよすがとする。

捉え方はないか、考えてみよう。

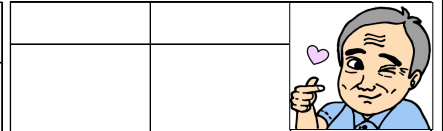
他人が作った詩や句を肴か子守歌か、にして眠れぬ夜の友とするところに、松島の光景に感動できたものがあつたのか、私には疑問に思えるのです。ほんとうに感動できる何かがあるならば、何としても、句は残すものだと思うのですが……。

古典

date: 年 月 日

学習内容: 推察する

学籍番号



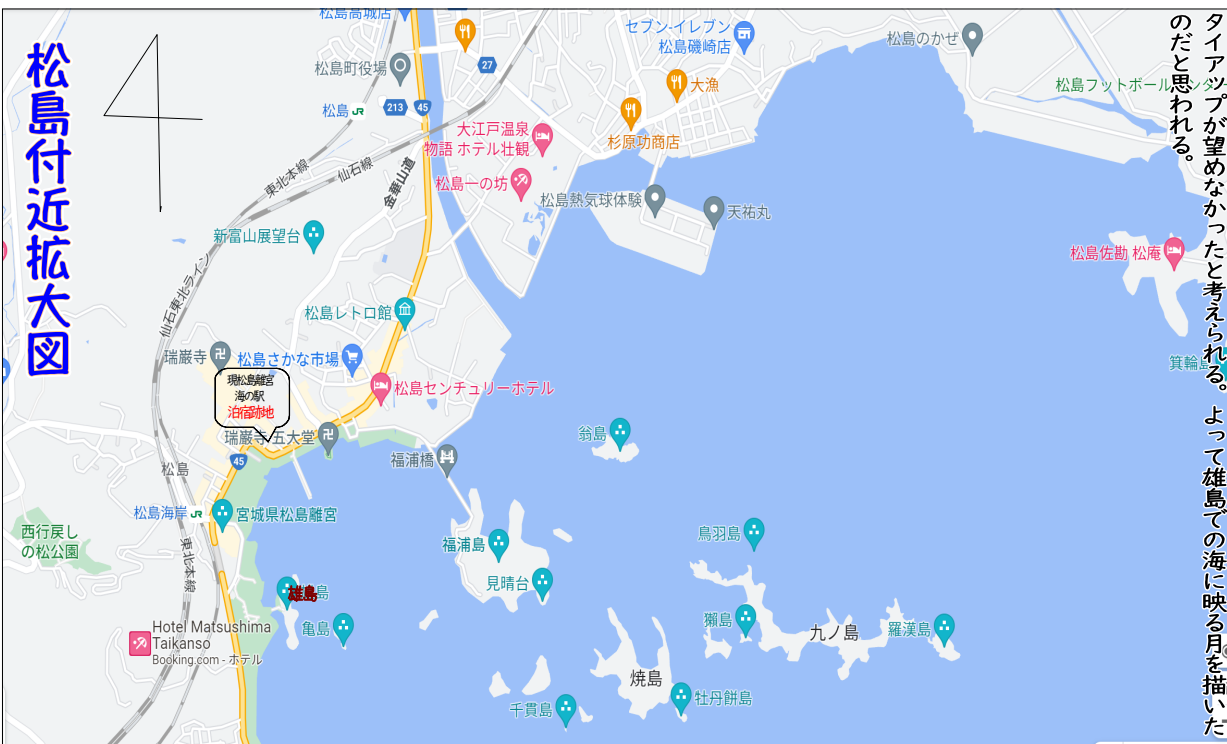
おくのほそ道 (資料)

氏名

おくのほそ道旅程図



松島付近拡大図



◎ここに一つの仮説を書いておきます。
 ・期待した以上(言われている以上)の光景が望めなかった。
 ・期待していたのは「松島の月まづ心にかかりて」松島の風景と満月のコラ
 ボであったのだろう。この日は九日(九夜月)であり、満月でもなく、月が見
 え始めるころには、南中近く月は高くなっており、方位からみても、島々との
 タイアップが望めなかったと考えられる。よって雄島の海に映る月を描いた
 のだと思われる。